

# 日韓軍事史研究会参加報告

谷村文雄

## 一 研究会概要

平成十四年十月二十四日、韓国のソウルにある韓国国防部軍史編纂研究所において日韓軍事史研究会が開催された。この研究会には、防衛大学校から田中恒夫助教授、防衛研究所から、林吉永戦史部長、山村健主任研究官、吉岡信夫主任研究官及び筆者が参加し、三件の研究報告を実施した。

日韓軍事史研究会は、二年前から軍史編纂研究所と防衛研究所戦史部の間で、日韓の歴史認識上の諸問題を解決するための研究会の必要性が検討され、第一回目として「韓国戦争と日本の役割」を中心テーマとして実施されたものである。ソウルの「戦争記念館」に併設された会議場等は良く整備されており、開会式では権永孝（コンヨンヒョ）国防部次官から日韓の軍事史交流の重要性を示唆した挨拶があるなど、今後二国間で継続的に軍事史研究会を開催していこうとする韓国側の主催者としての強い意気込みが感じられた。

## 二 研究報告

研究会は、三部で構成されており、第一部は、李鐘學（イジョンハク）ソラボル軍事研究所長の司会により実施された。最初に防衛研究所の山村・吉岡が「日本の朝鮮戦争研究」について、時代の流れに沿って発表を行った。次に軍史編纂研究所金幸福（キムヘンボク）戦争史部長が「韓国戦争初期における韓国軍の戦争指導」について、戦術面で戦力逐次投入の問題点を中心に明快な発表が行われた。次に、発表に対するコメントで尚志大学の徐東晩（ソドンマン）博士から日本の研究論文目録の重要性が指摘され、韓国戦争と一定の距離を保っている日本の研究が韓国にとって参考になることが強調された。そして、司会者は金博士の発表に関連して、五十年前の韓国戦争で活躍された方々の中からコメントを頂きたいとして、開戦当時李承晩大統領の護衛隊長であった李致業（イチョオプ）元陸軍准将を紹介し発言を求めた。李氏は、開戦当時の経験を踏まえつつ、

五十年前の戦闘を今日の視点で一方的に批判するのは適当でなく、当時の経験浅い指揮官達がそれなりに全力を尽くして戦った経緯を情熱的に語った。

第二部は、林吉永防衛研究所戦史部長の司会で実施され、防衛大学の田中助教が「朝鮮戦争における日本の国連軍への協力―その基本姿勢と役割」について、日本の協力を精神的協力、積極的協力、協力の継続の三期間に区分して体系的に発表した。次に、筆者が「日本特別掃海隊の役割」について元山上陸作戦を中心に発表した。発表後の討論で、平沢大学の金南均（キムナムギョン）氏から当時の日本は補給支援基地として最適の位置にあったことを指摘した上で、日本の難民管理、韓国に潜入したスパイと日本の関係等についての問題についても注目する必要があること、戦後の混乱が続いていた日本を朝鮮戦争がまとめる役割を果たしたのではないかとの論評があった。次に韓国国防研究院の宋永仙（ソンヨンソン）女史が谷村の発表を論評し、特別掃海隊の行動の経緯は良くわかったが、戦史は事実を記述するだけでなく、戦略的意味を確認する必要があることを指摘し、韓国有事の場合、日本が掃海艇を派遣する場合、命令系統と作戦根拠はどのようなものになるのか、一九七八年の日米防衛ガイドラインに基づいて機雷除去や海上テロに日本は寄与できるのか等の現在の戦略環境に関する質問が出され、朝鮮戦争の特別掃海隊は、国連軍の命令系統に属し、

ペルシャ湾派遣掃海部隊は日本の独立した命令系統で行動したと回答した。

第三部は金幸福軍史編纂研究所戦史部長の司会で軍史編纂研究所前任研究員梁寧柞（ヤンヨンゾ）博士が「韓国戦争期、北朝鮮のバルチザン活動と性格」について開戦から休戦交渉開始時期までのゲリラ活動を多角的に発表した。次にソウル大学朴泰均（パクテエギョン）教授が「韓国戦争直後における韓・米・日の関係の変化―軍事政策を中心に」について米国の安全保障政策から韓国の国際的役割を論理的に説明した。コメント及び質疑応答で、陸軍士官学校の金光洙（キムクァンス）氏は、多角的史料を用いて金日成路線とゲリラ活動の関連が良く整理されていると評価した上で、北のゲリラ戦は正規軍の補完的役割にあり、毛沢東路線とは異なっているのではないかとの指摘があった。また軍史編纂研究所南廷屋（ナムチヨンゴク）研究員からは、朴教授の扱ったアイゼンハワー政権のニュールック政策の見解は、経済政策で安全保障政策を恣意的に解釈しているとの指摘があった。

### 三 全般所見

研究会は、国防部の各研究所研究者の他に、ソウル大学、平沢大学等の教授の参加を得て、多角的な研究発表と活発な討論が実施された。特に、約一二〇人の聴衆の中には、朝鮮戦

争で陸軍参謀総長を務めた白善燁(ペクソニョップ)元陸軍大  
将や崔榮喜(チェヨンフイ)元陸軍中將が参加しており、朝鮮  
戦争の歴史認識に対する韓国軍人の関心の高さが感じられた。

韓国側の発表は、戦争初期の戦争・作戦指導やパルチザン活  
動の具体的検討などに狙いをおいていた。特に、戦争・作戦指  
導については退役軍人の参加者の関心が高く、その情熱的な論  
評から韓国における軍事史研究の一端が窺われ興味深いもので  
あった。日本側の発表に対する韓国側の関心も高く、日本にお  
ける朝鮮戦争研究の系譜並びに日本特別掃海隊の行動に対する  
関心が高かった。